S9-42

頭部外傷による遷延性意識障害患者に対する背面開放座位の検討　- 車椅子との比較

片岡 恵美子[1]、三崎 律子[1,2]、西郷 典子[1]、水元 志奈子[1]、大前 綾子[1]、足立 幸枝[1]、八木 良子[1]、松村 望東美[1]、衣笠 和孜[1]、大久保 暢子[2]

[1]独立行政法人　自動車事故対策機構　岡山療護センター、[2]聖路加看護大学

【目的】遷延性意識障害患者に対する背面開放座位の研究はこれまで数多くなされてきており、意識レベルや日常生活行動の改善が報告されている。殆どの研究が、仰臥位やギャッヂアップ座位との比較であり、車椅子との比較に関する報告は少ない。本研究は、頭部外傷を起因とした重症遷延性意識障害患者に対する背面開放座位の効果を車椅子と比較し、施行中の変化、変化の中でも微細な反応に焦点を当て、背面開放座位の有用性を検討した。【対象・方法】対象は，岡山療護センターに入院する遷延性意識障害患者 15 名（平均年齢 46.8 歳）。方法は、患者入院後、毎日、背面開放座位または車椅子を交互に行い、施行前と施行中の変化を測定項目に沿って行った。測定項目は、広南スコア、NASVA スコア、スコアでは測定できない微細な反応とした。分析方法は、背面開放座位もしくは車椅子乗車時に測定し、施行前・中における測定値の変化を分析した。微細な反応では、頸部自力保持、開眼、開眼時間の延長、スコアで測定できない表情変化を記入し、両姿勢での出現の割合を算出した。【結果】広南スコア、NASVA スコアでは、施行中の背面開放座位と車椅子では差はなかった。微細な反応では、頸部自力保持、開眼、開眼時間の延長において、背面開放座位が車椅子よりも反応が複数同時に出現し、その割合も多かった(15名中9名)。【考察・結論】過半数の患者に微細な反応が複数出現したことは、背面開放座位の有効性を意味付ける一助になると考える。微細な反応が、家族の回復への希望、看護師が患者の次段階のケアを考えるきっかけとなり、劇的変化ではなくとも、患者の大きな変化への小さな一歩になっていると推測する。